ナチ時代初期における「古参」言説とその「機能」

大曽根悠

1　はじめに

ナチ政権初期において、ヴァイマル期――即ちナチ運動の「闘争期」――からの国民社会主義ドイツ労働者党（以下、ナチ党）員はアンビバレントな立場にあった。政権獲得を目の当たりにした党員は約八五万人であったが、年末までに党員総数は約三倍に急増する。その要因は様々だが、入党という選択が多くの者に肯定的にみなされた結果だろう。そもそもこれら新加入者や各地の既存の有力者、当局者、一般の人々など広範な層の「貢献」がなければ、統治の現実に対応し、かつあれほど迅速な初期の変化を達成することはできなかっただろう。

では彼らが前面に躍り出て、「古参」ナチス[1]は勝利の果実を得られなかったのか。確かに官吏部門においてナチスへの劇的な人員転換が生じたとはいえないとする指摘もある[2]。しかしこの疑問に一義的な解答を与えるのは容易ではない。とはいえ「古参」ナチスがナチ運動の「成功」の主たる担い手であり、その処遇対応が特に政権初期の焦眉の問題であったことは論を俟たない。本稿は物質的な面とはまた異なった角度から「古参」に迫るものである。

ナチズム研究を振り返れば、それらが「古参」ナチスに十分な検討を加えてきたとは言えない。「古参」について触れたとしても、一部では、古くからの活動家と新加入者の二項対立的な図式を下敷きに、前者を「無能で粗野で腐敗した古参」などと定型的に理解してしまう研究者の側の不用意さが見られた。他方「古参」ナチスを明確に取り上げた論文などでは、中央や地方の個別具体的な党員・活動家の経歴や言動を明らかにする人物史的なアプローチが目につく[3]。豊富なナチ期地方・都市史研究でもこのような傾向は散見されるだろう。長い間少なかったナチ党研究は近年活況を呈しているが、近刊の成果でも、「闘争期」という過去を背負った存在としての「古参」は追究されていない[4]。他にもいくつかの研究は、入党申請受付停止措置や就労斡旋施策など「古参」にまつわる問題を取り上げ、これ自体重要な知見を提示しているが[5]、「古参」を検討する余地は依然残されている。

人物実体としての「古参」ナチスの、ナチ政権樹立以前も含めたバイオグラフィを明らかにするのはある意味アナクロニスムと背中合わせで

ある。それにそもそも「古参」を実体としてのみ扱うべきではない。当時の様々な言説において「古参闘士」などの語が指す対象は一定ではない上、そこに付与される意味も自明ではない。であればむしろ、様々なアクターが「古参」をいかに捉えるかについて検討することで「古参」を所与とする固定的な見方から脱することができるだろう。「古参なるもの」が立ち上がる局面から検討し、その意味を探らねば、当時の「古参」認識を一面的に繰り返してしまう恐れがあるのだ。人物実体・集団として前提してしまえば一見問うまでもない「古参」ナチスという形象は、そこに願望や期待、規範などの含意が映し出される投影板でもある。

本稿は、ナチ体制初期におけるナチ指導者／当局の「公的」な言説から「古参」形象について検討する。この時期、「古参」言説は豊富に生み出された。しかし近年のナチ党「古参闘士」研究でもそれを丁寧に解きほぐしたものはなお見られない。例えばスタンチウはベルリンの「古参闘士」の実態を「集合伝記的手法」を用いて明らかにしているが、その関心の焦点は「古参」の経歴上の展開にある[6]。ヴァーグナーは経験や記憶などの観点も駆使して「古参」を検討しているが、主な対象時期は戦時末期及び終戦直後である[7]。

体制初期の「古参」言説を検討するのは、単に研究上の欠落を埋めるためだけではない。筆者はそれがナチズムの権力掌握プロセスの理解に資すると考える。権力掌握については膨大な研究蓄積によって解明されつくしたともいえる。ただそれでも指摘するなら、それらは、ナチズム・ナチ党と既存の制度・人員との関係を、中央および地方の諸セクター、団体・組織に即して詳細だが細分化したかたちで検討してきたといえないか[8]。ナチ体制確立の内実はあまりにも多様である。しかし、個別には千差万別な変容のプロセスを推進した動力源の第一は政権獲得前からのナチ党員・活動家であったろう。「古参」言説とはいわば彼ら（の「過去」）を表象するものである。主要なナチ指導者や媒体を通じて醸成されたそれは、様々な領域分野・地域において権力を追求する年来のナチ活動家に横断的に届けられ、各自に咀嚼されただろう。

何より、――先取りすれば――この表象は今まさに権力掌握を推進するナチ党という組織総体の維持統制をねらったものでもあった。近年ナチ党研究を牽引するノルツェンは、体制期におけるナチ党成員の統合には党及び関連諸組織の巨大な網の目とそれによって社会経済、職業・日常生活等が覆われたことが決定的だったとする[9]。しかしそれが成立する過渡にある権力掌握期における党統合のメカニズムについて彼は丁寧な議論を示しておらず、本稿がこの点での貢献になりうる。

前述のように、新体制の確立にあたって「古参」と新加入者及びナチス支持者との折り合いをつけることは喫緊の問題であった。しかしそれと同様に懸案であったのが党本体と突撃隊（ＳＡ）の関係であった[10]。党の準軍事翼としてＳＡもまた政権獲得を目指すナチ運動に決定的な役割を果たした。街頭闘争や集会の会場防衛などに深く関わったＳＡは、ヒトラーを中心とする党指導部主流の「合法路線」と地域的、散発的に対立してきた[11]。両者は一部で重なり合い、また補完的な関係を持ち、総じてみればナチ運動のダイナミズムを支えたが、反乱主義的な傾向を持続させたＳＡはナチ体制初期の暴力の発露とその対応についてナチ党・政権に大きな課題を投げかけた。党に対峙する勢力でもあり、かつ「古参」として経験を共有してきた者を抱えるＳＡへの対処は特に本論後半で検討する。

用いる手がかりはナチ党機関紙『フェルキッシャー・ベオーバハター』（ＶＢ）を中心としたナチスの定期刊行物や書籍などである。内々の談

話や閉じられた会議上での発言というより一般ナチスがアクセスしうる次元の言説を検討する。[12] 従って「報道」や論説など様々な記事を等しく扱う。公けに発されるという意味でどちらも同様の位相にあると考えるからだ。また、集会やそこでの演説を伝える記事はいうまでもなく現場の光景や演説内容を取捨選択し、コメント・説明を付した形で構成し、整理している。「報じ方」の面にも留意し、現場で「実際に何が起こったか」というより、受容者がイメージを形作るであろう次元を重視する。

「古参」とはその語の本来の意味からして時間の要素を含む。よって「古参」言説は優れて記憶の問題でもある。「過去」を背負っているからこそ「古参」は「古参」たらしめられている。この要素を含みこんで検討しなければならない。「古参」は、ナチスという集合の中に存在する、単に党歴の長い者たちの一集団などではないのだ。ナチ指導者／メディアが、「闘争期」のナチスの何を強調していかに描出し、それでもって「現在」のその都度の情勢にいかに対応しようとしただろうか。「古参」言説の意味・位置価を考察する。

周知の概念史研究でコゼレックは、概念は過去、現在、未来の時間性を孕み、現実を指示するだけでなく、それに働きかけ、動かす性質を持つと大要論じる。[13] 概念は行動を導く「地平」と経験の「範囲」を設定する。[14] もちろん「古参」は彼が追究してきた「歴史的基礎概念」とは言えないだろう。それに本稿は個別の人々の行為・行動を熟考することはできない。ナチ当局による覇権的な「古参」解釈を解きほぐすものである。ただしコゼレックは、ある概念の（長期的でない）アクチュアルな次元（「現在性と実用論」）を検討するにあたって新聞や講話などの史料類型の有効性を指摘している。[15] 以上の点に示唆を得ていることを付記しておく。

以下、まず政権最初期に的を絞り「古参」イメージを抽出する。その後、「古参」言説とその都度の情勢との関係について検討する。本稿の最後に考察するのはいわゆるレーム事件をめぐる言説である。なお本稿は厳密な定義の追究を本意としないため、「闘争期」からのナチスを簡略に「古参」、「古参」ナチスなどと記す。

2　ナチ党の「古参」イメージ

（1）ナチ党「古参」イメージの醸成――その要素と語り方――

首相就任から一か月余りの二月二五日にミュンヘンで開かれた党の記念集会でヒトラーは、党の激動の歴史を潜り抜けてきた党員・活動家らの「煮えたぎる理想主義」、「忠誠、服従への意志」、「闘争の決意」、「国民社会主義的な僚友意識と共属感」、「頑強さと不屈さ」を称賛した。[16] 別の集会での呼びかけにもこのような諸要素が垣間見える。「もし君たちが忠実で従順な一介の男の如く将来も私を支えてくれるならば、世界のいかなる権力もこの運動を粉砕することはできないだろう！　運動は勝利の行進をさらに続けるだろう。もし君たちが、同じ規律、同じ服従、同じ僚友意識、そして同じ際限なき忠誠を未来においても保持するならば、――この運動がドイツから消し去られることは決してないだろう！　もはやこんにち我々のもとにはいない全僚友たちの名において、また彼らのために私が掲げる要求はこれなのだ」。[17]

わかるように、古くからのナチスの忠誠を一身に受けるのは指導者ヒトラー（自分）である。そして、「ドイツ」や（既に死んだ）「僚友」らに事寄せつつも、過去と変わらず今後も指導者に忠実に精力的な活動に励むことを彼らに求めている。「古参」たちによる過去の多様な実態

や経験は、「ヒトラーに忠実な活動家」たちという方向でいま選択的に結晶化される（「闘争期」にヒトラー以外のナチ指導者が少なからぬ影響力をもちえたことは捨象される）。それによって将来のありようが効果的に喚起される。こうして、「過去」と「現在」の連関に加え、将来のありかたについての期待や要求が「古参」言説には常に伴う。

以下本稿で詳しく検討していく「古参」ナチスイメージの基本要素は比較的容易に抽出できる。欠くべからざる存在として称揚される「古参」においては、いわば「ハード」なイデオロギーというよりは、その「美徳・徳目」の次元が際立つ。[18] またそこには、「古参」の「無私無欲」、「犠牲性」という要素も確認できる。[19]「古参」は、主従という截然とした非対称な関係とはいえ、指導者ヒトラーと緊密にかつ排他的に結びつく特別な地位におかれる。そして「古参」に言及する論法は「未来志向」と不可分である。

一九三三年七月、ヒトラーはいわゆる「革命終結」宣言を行った。二月末の国会炎上事件、三月の国会選挙、全権委任法制定をはじめとする諸事件が展開し、各地域では下からの迫害行動や諸団体の均整化が続くなか七月一四日にナチ党一党体制が確立する直前であった。

ヒトラー曰く、革命は「初期の一撃で成功した」、「革命は永続的な状態ではない」、「放たれた革命の奔流をより確固とした進化の河床へ導き入れねばならない」。「外形的な権力の獲得に、人々の内面的な教育が続かなければならない」。即ち「国民社会主義的な国家観へ」の教育だという。また彼は経済について述べる中で、非ナチの有能な経済人の配慮、能力重視、適材適所、労働創出、党の国家化、国家の中央集権制などに触れている。[20] かくして熱狂を伴う急変よりも、冷静で堅実に権力を固め、支配の安定化を追求する方向へ目標をシフトすることが強調された。この転換は、広い意味では、同年六月後半の「ケペニック血の一週間」事件に象徴的な剥き出しの暴力に対処する必要を政権指導部が感得したことも関わっているだろう。国際的な悪影響も考慮し、この夏以降暴力の過剰を抑制する方向へ傾いたことが研究で指摘されている。[21]

しかし以後も「革命」への言及は続く。要はその内容ないし重点が変化したのだ。この点に関連して、ナチ党への加入申請受付停止が発効する同年五月一日を前にして書かれたある記事を見る。「新参」のナチスに対する扱いと、彼らへの要求を記して曰く（要約して示す）、利益を得るためだけに加入するのは言語道断である。しかし遅れて加わったことは必ずしも非難されない。ナチ運動に距離をとっていた者も忠実で真面目になれば機会を与えるべきである。ただし粗野な反逆性は不必要である。「全国民社会主義者は闘士であらねばならないし、一貫した、精神の革命家であらねばならない」。見かけ上運動の敵が打倒されたが、なお広大な活動領域がある。人間的弱さ、感情的な混乱、非論理性、空虚な熱狂、公的な場での放縦さなどを排除しなければならない。ドイツ的な革命家は、指導者の教えを阻害するものに対抗するため身を投げ出す力を常に持つような者たちをいう。[22]

「精神の革命家」という言葉に端的なように、荒々しさと距離をとる上述の諸要素はここでは「新参」に対して求められたものだったが、先取りすれば、実は「古参」言説においてもこれらにしばしば出会うことになる。

「古参」イメージは次のような「語り」で束ねられる。「黎明の時代に既に入党した我々古参闘士は、手にするものなど何もなくナチ党のために全てを投げ出さねばならなかったときに、数百万の人々を後ろに従え、ドイツを熱狂させることができる運動に今日我々がなるだろうことを知

っていた。厳粛な、誇りに満ちた喜びが我々をとらえる。時代〔状況：引用者〕はしばしば深刻なものであったが、まさにこの深刻な時代は我々にとって最も美しい時代であった。それは、各地で敵と戦い、袋叩きにされ、罵倒され、嘲笑された時代だった」[23]。

こうした「歴史語り」は、当時豊富に生み出された[24]。「古参」なるものは、時間性がその本質にあるため「昔語り」は必然である。この型はしばしば、「厳しい迫害の中で成功を勝ち取った」という理路を辿り、「救済」と「歓喜」に至る。「古参」たちが指導者と結束してこの成功をもたらしたと強調され、それが「真」なるものとして語られる。

なお、荒々しさの抑制という点については注意が必要である。というのもナチス自身の暴力を「歴史語り」の中で隠さず表現することは頻繁にあったからである[25]。「冷静さ」などの要素が前景化したのは、より現在に重心のあるコンテクストの中で「古参」が言及される場合と考えられる。とはいえ、暴力を隠さない運動史叙述でも「犠牲」や「苦難」、最終的な「成功」といった型は往々にして踏襲されよう。また暴力・荒々しさも含みこんだ「闘争期」についての歴史作品に関して付言すると、ジーメンスによればこれらは、「本源的、闘争的ナチズムの時代」としてナチ運動の前半史を称揚する「歴史政策的な要件」を持つものだったという。しかも、これらを通じて「体制の記憶政治の中で確固とした卓越した場」を得られることが、特にレーム事件後のＳＡにとって意義深いことだったという[26]。

（2）階層的な「古参」と包摂的な「古参」

一九三三年半ば以降、各地で「古参」を主役とする集会がしばしば開かれた。その参加者は「最古参」から一九三二年に入党した者まで多様である。例えば同年一一月の「英霊顕彰」式典に際して、八日開催のシュターネッカーブロイでの集会には「一九二〇年に旧ナチ党に加入して一九二三年一一月九日まで間断なく党員で一九二五年に再加入した」、「最古参の党友が参加できる」のだという[27]。こうして現場レベルでは「古参」の中でも階層性が露わとなる。

ただここで注目したいのは、「古参」関連語の非統一的な使用である。ある集会の参加者が「一九二一年と二二年からの古参党友」、「古参衛士」、「古参闘士」とされる[28]。こうした「ブレ」は現場でもメディア上でも散見される[29]。確かに「古参」のラベルのヴァリエーションにおおまかな定義は存在する。加入時期の早さから順に「古参衛士」、「古参闘士」、「古参党友」となるが[30]、本稿の検討素材においてそれを厳密に腑分けすることにはあまり意味がない。時と場所によっては実際の「階層化」がなされるが、必要な場合には具体的な対象規定が示されるだろう。本稿が注目する言説レベルでは、結局力点は「古参」という部分にある。

用語の「ブレ」という意味ではＳＡの「古参」も同様に考えられる[31]。またＳＡの「古参」をめぐる語り方は党本体の人間が話題となる場合と相似形をなしている。「党の古参」か「ＳＡの古参」かという二者択一ではなく、（もちろん注意が必要だが）包括的な「古参」イメージが醸成されたというべきだろう（さらなる証拠は以後の論述で提示していく）。「古参」の語の曖昧さは、むしろそれゆえにこの概念の高い「汎用性」と「包摂力」を支えているといえる。

この「包摂」という点は、用語法の問題以上に「古参」像それ自体から指摘できる。それは一つに、「古参」こそが現実の区別・差異を拭い去る存在だとするものである。「最古参の役職統括者」の会合に関して次の一節がみられる。「ここには称号などない。ただ彼らは僚友であ

り党友なのである。国家総督か、細胞指導者か。大臣か、地方支部指導者に関わらず！」[32]。一一月の「英霊」式典で参加者が一様に「褐色シャツ」を着用して行進する演出にも、「古参」が統一性・均質性を体現する主体だとする意味があろう[33]。

もう一つに、現実の差異を受け止めたうえで、全体を束ねる紐帯として「古参」をみなす言説がある。あるSA集会で幕僚長レームは、「君ら古参闘士は新参〔ないし若年者〕の模範だ[34]」とした。また別の集会で、「我々古参は指導者に常に忠誠を保ち続けるだろう」と言う東ハノーファー大管区指導者代理は、新参を見下すことは「古参衛士」のすることではないとする[35]。「古参」の（少なくとも象徴的な）特権性は払拭しきれなかっただろうし、むしろそうすればジレンマも生じよう。よってこの「模範」のモチーフは巧みであった。

以上、「古参」概念の曖昧さ、「古参」イメージに込められる結節点としての位置値、この二重の意味での包摂性が指摘できる。こうした発見を敷衍すれば、「古参」には、実現されるべき民族共同体をまず体現する前衛としての性格が充てられているともいえよう。

3 「古参」イメージの「援用」

（1）一九三三年一一月の国民投票をめぐって

ここからは一九三三年末頃からのいくつかの事象に着目し、そこにいかに「古参」言説が絡んでいるかを検討する。

軍備の問題に端を発した国際連盟からの脱退の信を問うため同年一一月に国民投票が行われた。その直前、指導者代理ヘスは投票呼びかけの言葉で次のように述べた。曰く、「アドルフ・ヒトラーが新しいドイツを創造することができたのだとしたらそれは、古参闘士の、アドルフ・ヒトラーとフォルクへの忠誠、血と遺産への献身、常に犠牲を厭わない姿勢、信頼に足る「貫徹力」のおかげである」。続けてヘスは「歴史語り」を展開して「古参」たちの献身と忠義を「証明」する。そうして、「「古参」は全体として国民から感謝を受ける資格がある。彼らがそこで苦労し闘ってきたところの運動に投票で賛成を表明することを通じて国民は彼らに感謝できるのだ」と主張する[36]。この論理の効果の程は疑わしいが（実際この論説の中では、全体として一般の人々に配慮し、また、指導者ヒトラーと彼の統治に対して賛意を示してほしいという旨、付言している）、「古参」イメージを参照して正当化や主張を行うレトリックそれ自体に注意したい。

国民投票は賛成九二・三％に終わった。投票後、「ベルリンSAの古参衛士の名誉の日」集会が開催された。記者は、「この勝利〔国民投票の成功のこと〕は、ここ「赤いベルリン」で〔運動の〕初期からヒトラーの旗に従った褐色シャツに身を包んだ者、古参たちの正当性の証明である」と記し、SAの高級指導者のエルンストの言葉を示す。〔この日SAとSS（親衛隊）の古参に授与された名誉腕章は単なる〕「古参の特権を意味するだけではなく義務も意味する」。「この腕章の所持者は、古参のSA精神、即ち運動が大きくさせた精神がこれからも褐色の軍隊の中で生き続けることの保証人である。（…）もし君たちが過去の姿のままであり続けるならば、即ち勇敢な心と犠牲の喜びを湛えて、忠実に、頑強に、規律正しく、従順であり続けるならば、私は指導者、運動、そして我がSAに対して心配を感じることはないだろう[37]」。

投票の「勝利」が活動の正しさを証明し、もってそれが「古参」の功績だとして彼らを高める。過去、現在、未来を効果的に結びつけた一

節である。ただ先の、ヘスによるある種強引な論理は、「古参」とそれ以外の者との非対照性を強調してしまう。翌一九三四年にはこの問題が喫緊なものとなっただろう。

（2）一九三四年前半の諸集会・キャンペーン

一九三四年二月二五日にナチ党本体及び分肢、附属団体の――「古参」だけでなく広範な――役員らが全国各地でヒトラーに向けて忠誠宣誓をする大規模な式典が行われた。

アドルフ・ヴァーグナーは論説で、星や勲章を持たない一介の「古参」が幻滅しかねない現状があることを受け、「君たち、古参を敬え！　彼らに感謝せよ、彼らに模範を見て取れ！」と「新参」に求める。しかし他方で「古参」を引き締める。かつてのように、またヒトラーのように「質素に、勇敢に、忠実に」あれ、と。[38] これは彼が、「古参」の優遇や利得がしばしば不興を惹起していることを認識していたからだろう。[39] おそらくそれゆえヒトラーは集会当日の演説で「古参」の「フォルク」との接続を意識したのだろう。即ち、運動の活動家はかつて「フォルク」から生じ、前年の国民投票の「勝利」にまで至った、と。「いまやドイツの復活の象徴となった旗の最初の信者に数えられることは誇れる」。しかし「まだ運動は目標に到達していない」。従って昔と同様に「ドイツの人々を獲得する長い闘い」を遂行するのだ、という。[40]

さらに興味深いのは指導者代理ヘスによる「宣誓」演説である。[41]

彼は、政治指導者（党本体の各支部で活動する役職従事者）が反乱を企図している、あるいはＳＡは行き過ぎだなどという非難は全く「馬鹿馬鹿しい」として「誤解」を解く。むしろ「両者は相変わらず不可欠で同価値」である。「両者は国民社会主義の使者であり擁護者として運動の軍団」なのだという。続けてこういう。「ＳＡと政治指導者はその共通の伝統を持っている。それは「古参衛士」に体現されている」。「彼ら〔「古参衛士」〕とは、国民社会主義のもとでのドイツの再興のために早くに自らの命を賭し、あるいは差し出した者全てを含む。彼らは、その血と犠牲でもって我々のフォルクの未来を勝ち取ったという名誉を有する者である。彼らは、新たなライヒの中で生きられることを人生の幸福と感じている全員の感謝に値する」者だと。そしてさらに続ける。「古参衛士」が模範的に生きてきた「闘争共同体の存続」は、「無数の古参のＳＡ隊員とＳＡ指導者が我々のもとに加わり、政治指導者、ＨＪ〔ヒトラー・ユーゲント〕指導者ないし労働奉仕団指導者として任務に就いているところに表れている」。

（党本体を体現する）政治指導者とＳＡ隊員は「古参」という共通の歴史によって結束しており、現在「古参」がナチ党諸組織の「共同体」性を支えているという。かくして――「闘争期」における党とＳＡの軋轢という事実を捨象しつつ[42]――ヘスは、一部に燻る党とＳＡの不信や、またちょうど同時期にレームが新たにした革命継続の主張[43]が引き起こした不安に釘を刺した。党全体の統一を言明する論理に、原初的な国民社会主義者としての「古参」形象が役割を果たしている。

この後ミュンヘンの本会場では何人かの高位指導者が言葉を継いだ。そこでも程度の差はあれ、ナチ運動の「歴史語り」をさしはさみ、「古参」に言及した。この式典では本会場の模様が生中継された。全国各地で大小の集会が同時並行で開催され、そこで党本体、関連諸組織の役員らがヘスによる忠誠宣言を一斉に唱和したのだった。[44]

翌三月の「古参闘士の革命アピール集会」でヒトラーは言う。困難な時代に集結し、「忠誠、服従、信念、僚友意識、自信、勇気、不屈とい

う規律」でもって「我々の党の古参闘士」が成し遂げた「世界観の勝利は革命であり、フォルクの状態を深い内奥から、そして本質的に作り変えるような革命であった」。この集会ではヒトラーは「新参」に注意を促す。即ち、彼らは至る所で「古参」から見習わねばならないと。「国民社会主義者であるということは（…）心の問題である」。全ての者が心において国民社会主義者たれたとき（要は本段落冒頭の諸徳目を身につけること）、「国民社会主義の革命は達成する」という[45]。より広範なナチ役員を前にした忠誠宣誓式とは一転し、ここでは「古参」称賛の態度が明白である。この点に関連してある警察報告が現実の一面を伝えているかもしれない。それによれば、新たにナチ運動に加わった市民層が不満を吐露している。即ち、ヒトラーが「民族共同体（…）の中にある誰もが、古参闘士であろうとなかろうと関係なく寛大に受け入れられる」と述べているにも拘らず、自分たちは「二級に扱われていると感じる」、と[46]。

いずれにせよ、ここではヒトラーの描いた「革命」の性格に注目しよう。「闘争のエートス」と題された論説[47]がある。その後半は要約すれば以下のようにいう。即ち、闘争のエートスを模範的に体現してきた古参のSA隊員たちから常に新たな課題と義務付けが生じる。彼らは国民社会主義の思想の遺産の保証人であるべきだ。他方、今になって古参闘士と同権を主張し、肩を並べて思いあがっている不平家や自惚れ屋[48]は、過酷な時代に闘争せず、勝利の瞬間になってやってきた。彼らは闘争のエートスを理解しなかったことをこの行動で証明している。ただ、後から加わった者は学ぶべきであり、古参のSA闘士は彼らの師（Lehrmeister）となる。というのも、指導者がドイツの民族共同体を設立したのだとしたら、その成功は古参闘士の行動力を信頼して達成されたのだから。古参のSA隊員はSAの倫理的な基盤、即ち闘争のエートスが破壊されずに永遠に保持され続けることに責任を持っているのだ。

（ここでは新加入者とされる）不平家をたしなめつつ包摂し、「古参」を模範として持ち上げ、両者に課題や責任を課す。こうして同論説は両者への配慮を展開する。しかしこの論の組み立てのかなめとなる「古参」イメージでは、「倫理的基盤」としての「闘争のエートス」という面が前景化している。闘う姿勢は物理的な実力行為ではなく、活力に溢れるが抑制的で規律だったものであることが望ましい。先のヒトラーによる「革命」もほとんど「徳目」の修得にみえた。一見新加入者ないし市民に厳しく迫り、「古参」の価値切り上げをねらっているようで、後者の急進性を掣肘する両にらみの姿勢がナチ指導者・当局にみられるといえよう[49]。

（3）「レーム事件」収拾をめぐって

一九三四年六月三〇日から数日にかけていわゆる「レーム事件」が起こった。SA指導部、保守派、その他体制に敵対的とされた者、私怨から標的にされた者らの粛清事件である。本稿ではこの原因や経過には触れない。レームによる国民軍構想と国防軍の軋轢、ナチ指導部及びSSとSAの対抗関係、保守派による体制批判、失業や不作からのナチス・民衆の不満等の諸問題が漸次的累積的に行き詰まり、これらを一時に解決するものであった。先行研究はレームが反乱を企てた証拠はないとする[50]。「反乱」という理解は粛清した側の正当化を反映している。

本稿の関心から注目するのは「事件収拾」言説である。「事件」後といえば、たいていカール・シュミットのヒトラー賛美や、一般社会レベルでのヒトラーの声望の高まりを指摘するに終始してきたように思える。だが実は「古参」について頻繁な言及がみられるのである。

七月二日ゲッベルスはラジオで事件を速報的に伝えた。[51] 彼は、事件の推移を述べるなかで、移動の途上で出会ったあるSA高官を「全く何も知らない古参の忠実な戦友」とし、粛清された者を「陰謀に駆られた罪深い大逆者」と描く。また新たにSA幕僚長に任命されたルッツェを「我々の古参の僚友」とし、粛清された者たちを「陰謀者のギルド」などとする。後者にレームら粛清された者が含まれよう。さもなくばこの二分法は成立しえない。レームはじめSA高官たちは活動歴・所属歴からしてもまさに「古参」であったからだ。[52] つまりここで、彼我を分ける基準として「古参」形象が機能しているのだ。

事件後に引き締めを狙ってヒトラーから新SA幕僚長に示された「一二箇条の布告」（これは各紙に掲載された）のうち第一〇条は次のような内容であった。「私は、古参の忠実な党友、SAの長年の闘士が見捨てられないことを幕僚長である貴殿に期待する。（…）私は、我がSAの中に、最も忠実で勇敢な従者たちという驚嘆すべき基幹部を有するのだ。ドイツを征服したのはこれらの者たちであり、一九三三年とそれ以降に来た抜け目ない遅参者ではない」。[53]

一九三三年より前に加入した者こそ重要だとするが、そこに粛清された者は含まれない。彼らは「古参」像の核心である忠実さを反故にしたからである。「闘争期」のSAを扱ったある書籍の一九三三年版にはレームら粛清された者を含むSA指導者の肖像写真のページがあったが、翌年版には肖像写真のページ自体がなかった。[54] どちらも事件前の出版だったが、「レーム反乱」に参加した者の写真を含むという理由でザクセン内務省によって前者の販売が禁止されたのだ。[55]「古参」とは極めて現在に立脚した形象であることを示す一例であろう。

「SAの最高指導部内での粛清行動は、SA隊員たちそれ自体とは何の関わりもない」とヘスは述べる。[56] 首謀者の局所化は事件収拾言説において重要なモチーフである。ここに「古参」形象が関わっていたわけだが、それは「包摂」と表裏一体であった。首謀者は「最高SA指導部の一部」であったとするゲーリングはこう述べる。「我々は、古参のSA隊員、即ち一九二八、一九二九、一九三〇年に大義に没頭したSA隊員が再び栄誉に浴するために行動したのである」。[57] かくしてこの行動は「古参」に支持されたとして[58]事件が正当化されていく。

一部のSA指導者たちを粛清することで残りの大部分の隊員までも切り捨てることが得策でないことは明らかである。この時SAはおよそ四五〇万人を数えた。とりわけ粛清された指導者らと曲がりなりにも「闘争期」を共にしてきた「古参」のSA隊員らの不満を高めることは避けねばならない。「ヒトラーに忠実な古参」という像はまさにここで力を発揮した。[59]

事件収拾の言説で触れられたのはSAだけではない。ヘスは党本体を代表する立場からSAを承認する。「党は古参のSAを忘れなかった！」「党はこの日々〔粛清の日々〕においても、権力獲得前の時代からの古参SAに対して以前と同様の尊敬を向けてきた。というのも闘争の時代にSAが成し遂げてきたものを、そして彼らが自らにどんな犠牲を払ってきたかということをどの国民社会主義者も知っているからである。運動の死者の大部分はSAの隊列からもたらされていることが思い出されねばならない」。そして「SAと党の歴史的な関係性」や「SAの原初的な意義」を強調するヘスの発言を総括して記者は「次のような深い印象」を記す。「即ち、古参のSAとは少しも共通点を持たないような精神から発生した上層部の反逆が崩壊し、こんにち再び、共通の国民社会主義闘争という密接な結束（…）が党の全ての組織団体を結び付

ける。一九三四年六月三〇日はかくして党の歴史における何らかの終わりの日ではなく、ひとたび古参ＳＡの新たな歴史の始まりの日としてしるしづけられるのである」[60]。

またあるＳＡ大隊指導者は言う。ＳＡは「暗黒の、権力に飢えた目標」に従わなかった。「ＳＡ隊員は指導者に忠誠を誓った」し、「古参ＳＡの精神は生きる。そして今まさにそれは栄誉に与るだろう」と。そして「我々は、無名のＳＡ隊員の神秘に加えて無名の街区担当者の神秘をも知っている」。「党組織の成員は、ＳＡ、ＳＳの隊員そしてＨＪの革命的な闘士と同じように血を流した」として「国民社会主義の闘争共同体」を強調する[61]。先のヘスは党本体の高位ナチ指導者の立場から、そしてこちらはあたかも一介のＳＡ隊員の立場から、共通の運動の経験を梃子に党とＳＡ、諸組織の一体性を断言し、融和を望む声を発した。

「事件」後の展開のハイライトは七月一三日のヒトラーの国会演説であった。そこでも「古参」に言及して一部、論を展開している[62]。

多くの「最古参の最も忠実なＳＡ隊員」が昇進や任用で蔑ろにされ、「古参のＳＡ隊員」は飢えを耐え忍ぶ状況になり、第二革命の策動を証言しようとした古参のＳＡ隊員は虐待された、などと事件前の状況について彼は述べる。「古参の忠実なＳＡ指導者とＳＡ隊員」が、策動に適した政治的に無教育な分子によって完全に脇に追いやられてしまっていた。また、「反乱」グループに内心の嫌気と拒絶を隠さなかったため責任あるポストから退けられ、「根本からの品性のために拒絶された古参のＳＡ指導者たちの先頭にあった」のがルッツェとヒムラーであったとする。そしてついに、「ＳＡそれだけでなく、品性ある数百万の党友と数一〇万の古参闘士たちから、いくばくかの低価値の輩によってその名誉が騙し取られることがないようにするため、これら分子の最終的で徹底的なＳＡからの除去を〔レームに〕求めた」。しかし「話し合いは、幕僚長レームが（…）私という人間の排除それ自体を準備するという結果に終わった」。

ヒトラーはレームに対しＳＡ幕僚部内の引き締めを求めていたという。レームがこれを反故にして逆に指導者を排除しようとした（とみなされた）ことで「古参」に不可欠な忠誠が破られ「裏切り」が成立したという論理になるのだろう。このレームと結託した勢力に関しては国会演説より前のルッツェの紙上インタビューが示唆的である。そこで彼は、「共産主義者、社会民主主義者、ドイツ・ナショナル、あるいはＳＡのシュテンネス陣営から来た政治的に信頼できない分子」の受け入れを、「粛清されたＳＡ指導者らの何人かは（…）望んでいたようである」とした[63]。これは「一時で」の問題解決を図った謂いであろう。

以後、事件収拾言説で見られる上述の要素は繰り返される[64]。しかも、既に七月一日以降宣伝省は、ＳＡに関してはドイツ通信社経由の配信記事を掲載するよう国内各紙に報道指令を発していた[65]。効果のほどは議論の余地があるが情報を水路づけようと試みたのである。

大統領ヒンデンブルク没後、権力をヒトラーに集中する決定の賛否を問うため国民投票が行われた。それに先立つ八月一四日に「ＳＡの古参衛士がドイツ民族に語りかける：「全ての力を指導者に」 ヒトラーの古参闘士が国民投票に際して語る」と題する記事がＶＢの第一面に掲載された[66]。三日間続くこの連載記事（二日目以降は第一面ではない）の趣旨説明にはこうある。「ＳＡの古参衛士は国民社会主義運動の支柱である」。ＳＡ隊員がヒトラーについて話すのを聞くのが両者の関係性を知るための最善の方法であるためこの特集記事を掲載するという。ここで登場する一介の「古参」たちは、思い思いにナチ運動での苦難と喜び

の経験とヒトラーへの不変の忠誠、そして投票への期待を吐露した。この企画は、国民投票に向けたVBの重要な紙面編成計画の一つであった[67]。同企画案出の詳細は不明だが、編集部はこの機会に「古参SA」に注目する意義と効果を認識していたのだろう。

三日目の記事の最後で、企画を総括するように記者は次のように記す。「運動のとりわけ古くからの闘士は、本物の、正真正銘のSA精神のもとかくの如く語る。このSAの精神が絶えず生き生きとし続け、自己の闘いのなかで輝くことが誠に明瞭になった」。「八月一九日に行われる聖なる義務について密かな疑念をなお抱いている全ての民族同胞が特にこの言葉を数百回にわたって耳にする」ことが望まれる[68]。前年一一月の国民投票に際したヘスの言葉が想起されるが、ここでは投票の呼びかけと「事件」の鎮静化が「古参」を介して結びついている。

党の諸組織の結束・一体性に腐心する言辞も断続的にみられる。ヒトラーは九月上旬の党大会演説の終盤で、翌年の課題の第一に「党と分肢の内的秩序を一層維持すること」をあげる。即ち、「古参闘士、政治部門、SA及びSSの組織をただ一つの結託した共同体へ変貌させることが我々の課題となろう」。人々はこの共同体に加わり、ここを通じて国家と関わることになるという[69]。一一月の「英霊」式典に際し各地で開かれた集会で、ライプツィヒのある管区指導者は「こんにち政治組織の儀礼装をまとう全古参闘士はかつてSA隊員であり、彼らの中に古参のSA精神が常に生き生きと維持されてきた[70]」と述べた。「事件」後、SA隊員は党本体への加入が要請されたが、同指導者はおそらくそれを念頭にSAの慰撫と党の結束を狙ったのだろう。

キャンベルはベルリンSAの指導者層を検討して、「事件」後、SAから排除されなかったのは「闘争期」から党本体やその指導者らと良好な関係を築いてきた者たちだったとした[71]。一般化には慎重さを要すが、彼が指摘した事例は、党とSAは同じ闘争の歴史を経験してきたというあの「古参」言説に現実が合わされた、換言すれば選択的な記憶が「事実」となった一例ともみなせよう。

いずれにせよ一連の展開の中で党本体の成員（特に「古参」）も「収拾」言説を無視できないものと受け止めたはずである。本稿が示したように大部分のSA隊員は事件と無関係にされたとはいえ、不適格とみなされた者には自主脱退や除隊が迫られ、実行された[72]。この引き締めは党全体におよび、多くのナチスに無縁ではなくなった[73]。広範な人々にヒトラーの国会演説や「一二箇条」は歓迎され、ナチ党のあらゆる組織で後者の遵守、ひいては綱紀粛正の貫徹を望む声が各地で上がったことを警察報告書は伝えている[74]。

「古参」イメージは、既にわかるように現実と乖離した面を濃厚に湛えている。それは、個々の「古参」の党員活動家が実際に直面しているかもしれない苦境や不満を覆い隠し、あるいは彼らの期待に反したものでもあったろう。「古参」形象を梃子にして党全体の結束の維持が図られたわけだが、それによって各人の状況が即座に好転したわけでもないだろう。「古参党友」が「新参党友」や「反動」が優遇されるのを見て嘆いていると記す報告があれば、他方で、「古参闘士、新党友、そしてその他の民族同胞」と結局「民族同胞が三つの等級に分けられている」と市民や農民が不満を漏らしていると伝える報告もある[75]。

しかしそれでも、覇権的な「古参」像とその語り方や応答の仕方は、「安全」な自己／現状認識のレパートリー、換言すれば解釈の枠組みの提供を意味したろう[76]。一介のある「古参」は一九三四年八月に自伝的手記でこう記す。「レーム反乱について少しだけ言いたい。即ち、ヘッセンの我々

はそれに何の関係もないということである。（…）七年間にわたり私はＳＡ隊員であり、必要とされるところで自分の義務を果たしてきた。そして指導者が今日、かくあるべしと呼び掛けるならば、我々古参は再び毅然とした態度をとるだろう。ハイル・ヒトラー」[77]。

4　おわりに

ナチ党研究および権力掌握研究はほとんどナチ党「古参」イメージに注意を払ってこなかったが、体制初期に「古参」言説は驚くほど頻出する。「古参」イメージは、ナチ指導部・当局による党マネジメントの一つと捉えることができよう。

「古参」イメージは、勇敢、不屈、決然、指導者ヒトラーへの忠誠、僚友意識、犠牲性などの徳目によって構成された。それは選択的な過去を「真実」として断定的に描写したものであり、優れて現在において意味を持った。「古参」はしばしば「歴史語り」において繰り返し再生され、現在および将来にむけた要請のアピールを伴った。現実には「古参」の内部で階層化が顕在したが、厳密さを欠く用語法に加えて「古参」イメージそれ自体の広い射程のために、柔軟な包摂力がそこに持たされていた。それは一方では、「古参」それ自体が、「共通の経験」を依り代にして差異を払拭する形象として描かれたこと、他方では「古参」がナチ運動・国民社会主義の模範として新参のナチスや非党員を導く存在と位置付けられたことにみられる。

このような「古参」イメージは集会の現場やメディア報道・論説で醸成されていったが、それは当時の情勢を反映し、かつそれに対応しようとする積極的なものでもあった。「古参」への言及は総じて現状における彼らの価値切り上げを図るものであり、それはまた、不満を鬱積させる彼らの一部を単に慰撫するだけでなく、党全体の団結と融和を目指すものでもあった。しばしば新加入者・保守派などについては、彼らの中でも能力を持った者は慎重に取り立てるべきとされ、「古参」は彼らを主導する地位に置かれた。「古参」の「精神」や「エートス」の強調は、しばしば問題となっていた荒々しさや違反行為を戒めると同時に、それが運動全体の基礎をなすという意味で「古参」の特権的な地位を担保する。こうしてある意味バランスが模索されたといえよう。

この「古参」イメージを援用した情勢対応は「レーム事件」においてもみられた。事件を解釈し動揺を収拾する言説でナチ指導者たちは「古参」イメージに依拠して「反乱」の首謀者とその他多くのいわば無垢なＳＡ隊員たちとを切り分け、「古参」の名誉を守るため粛清に至ったと正当化した。「事件」及びその後ことあるごとに、「古参」に言及しつつ党の結束を図る言説が繰り返された。「古参」言説からたちあがるそのイメージは現実との乖離が濃厚ではあったが、アクターの行動を理由付ける可能性を有していた点で空虚なものではなかった。

「レーム事件」についていえば、その前後を連続的に理解するにあたって「古参」形象は無視できない――しかし「事件」研究でもこれはほぼ注目されてこなかった――。「事件」はしばしば権力掌握の最終局面とされ、これを期にヒトラーの力が確立し、ＳＡに代わりＳＳが主導権を握ったという小括がなされがちである。だがいうまでもなく現実にはＳＡに限らず大部分の活動家たちはこれ以後も「日常」を継続する。ＳＡは「事件」後に価値を失ったわけではないと近年強調して指摘されている[78]。本稿が示した「レーム事件」考察の新たな視点は、この断絶を架橋する一論点となるだろう。

最後に、「古参」イメージの内容は「徳目・モラル」と捉えられるものであった。「モラル」の面でもレーム事件は画期とされるが[79]、本稿の議論に基づけば、ナチ的な「モラル」は、体制最初期からの「古参」形象という記憶の構築と援用を通じても、漸進的に積み上げられていたと考えることができる。しかも「古参」イメージが単に「古参」当事者にとどまらない射程を持つものであった（原初的国民社会主義者！）だけに、本稿の対象時期の後における「古参」像、ナチス像、ナチ的な「モラル」の関係はさらなる研究課題となろう。

注

（1）本稿では基本的に「ナチス」をナチ党本体及びその分肢・附属団体の成員（場合によってはその協力者）と広義の意味で用いる。

（2）Vgl. Bernhard Gotto, *Nationalsozialistische Kommunalpolitik: Administrative Normalität und Systemstabilisierung durch die Augsburger Stadtverwaltung 1933-1945*, München 2006, S. 112f., 117f.

（3）前者は例えば次。Michael Grüttner, *Brandstifter und Biedermänner: Deutschland 1933-1939*, Stuttgart 2015, bes. S. 83-85. 以下も参照。大曽根悠「ナチ体制初期『情勢報告』におけるナチ党「古参闘士」――亡命社会主義報告書の検討――」『史境』第七二号、二〇一六年、六四－六六頁；Anja Stanciu, *»Alte Kämpfer« der NSDAP: Eine Berliner Funktionselite 1926-1949*, Köln 2018, S. 7f., 243f.

（4）Sven Felix Kellerhoff, *Die NSDAP: Eine Partei und ihre Mitglieder*, Stuttgart 2017; Hans-Ulrich Thamer, *Die NSDAP: Von der Gründung bis zum Ende des Dritten Reiches*, München 2020.

（5）近年のナチ党研究は以下など。Wolfgang Benz (Hrsg.), *Wie wurde man Parteigenosse?: Die NSDAP und ihre Mitglieder*, Frankfurt a. M. 2009; Armin Nolzen, The NSDAP after 1933: Members, Positions, Technologies, Interactions, in: Shelley Baranowski, et al. (ed.), *A Companion to Nazi Germany*, Hoboken, NJ 2018, pp. 97-114; Jürgen W. Falter (Hrsg.), *Junge Kämpfer, alte Opportunisten: Die Mitglieder der NSDAP 1919-1945*, Frankfurt a. M. 2016; ders., *Hitlers Parteigenossen: die Mitglieder der NSDAP 1919-1945*, Frankfurt a. M. 2020.

（6）Stanciu, *»Alte Kämpfer« der NSDAP*.

（7）パトリック・ヴァーグナー（今井宏昌訳）「「古参闘士」の最後の戦場――第二次世界大戦最後の数ヶ月におけるナチ活動家の孤立・共同体形成・暴力――」『ヨーロッパ研究』第一八号、二〇一八年、三三－四七頁。

（8）「権力掌握」研究の一部として以下。Karl Dietrich Bracher, u.a. (Hrsg.), *Die nationalsozialistische Machtergreifung: Studien zur Errichtung des totalitären Herrschaftssystems in Deutschland 1933/34*, 2. durchgesehene Aufl., Wiesbaden 1962; Wolfgang Michalka (Hrsg.), *Die nationalsozialistische Machtergreifung*, Paderborn 1984; Benjamin Ziemann, et al, "Machtergreifung": The Nazi Seizure of Power in 1933, in: *Politics, Religion & Ideology* 13 (3), 2013, pp. 321-337.

（9）Armin Nolzen, Mechanismen der Mitgliederintegration in der NSDAP: 1925-1945, in: Stefano Cavazza, u.a. (Hrsg.), *Massenparteien im 20. Jahrhundert: Christ- und Sozialdemokraten, Kommunisten und Faschisten in Deutschland und Italien*, Stuttgart 2018, S. 95-108.

（10）SAについては以下。Peter Longerich, *Geschichte der SA*, 1. Aufl., München 2003; Daniel Siemens, *Stormtroopers: A New History of Hitler's*

テ』第九号、二〇一六年、三五－四七頁。

（19） Vgl. Für die ersten, selbstlose Kämpfer, in: *VB*, 20. Mai 1933, S. 2; Die Arbeitsbeschaffung für die „Altparteigenossen“, in: *VB*, 25. Juli 1933, S. 2.

（20） Adolf Hitler über Staat und Wirtschaft, in: *VB*, 8. Juli 1933, S. 1.

（21） Stefan Hördler (Hrsg.), SA-Terror als Herrschaftssicherung: „Köpenicker Blutwoche“ und öffentliche Gewalt im Nationalsozialismus, in: ders. (Hrsg.), *SA-Terror als Herrschaftssicherung: „Köpenicker Blutwoche“ und öffentliche Gewalt im Nationalsozialismus*, Berlin 2013, S. 12f., 16f., 27.

（22） Ansturm der Gesinnungstüchtigen, in: *VB*, 30. April 1933, S. 3.

（23） Zwölf Jahre Ortsgruppe Hannover, in: *VB*, 13. Juli 1933, S. 3.

（24） 例えば以下。Wilhelm Fanderl, *Von Sieben Mann zum Volk: Illustrierte Geschichte der NSDAP. und SA.*, Oldenburg i. O. 1933; Leopold von Schenkendorf / Heinrich Hoffmann, *Kampf um's Dritte Reich*, Altona-Bahrenfeld 1933; Die Alte Garde, in: *Die Fahne Hoch!* 23, 1934.

（25） 例えば以下。Wulf Bley, *SA marschiert: Leben und Kampf der braunen Bataillone*, 12. Aufl., Berlin 1935.

（26） Daniel Siemens, Dem SA-Mann auf der Spur: Nationalsozialistische Erinnerungspolitik im Berlin der 1930er-Jahre, in: Hördler (Hrsg.), *SA-Terror*, S. 162f.

（27） Der Ehrentag der nationalsozialistischen Bewegung, in: *VB*, 3. November 1933, S. 2. 類例は他にも Gardetreffen in Oranienburg, in: *VB*, 10. Oktober 1933, S. 4.

（28） Zwölf Jahre Ortsgruppe Hannover, in: *VB*, 13. Juli 1933, S. 3.

（29） 例えば以下。Marsch der alten Kämpfer von 1923, in: *VB*, 14. September 1933, S. 3.

Brownshirts, New Haven 2017.

（11） Sven Reichardt, *Faschistische Kampfbünde: Gewalt und Gemeinschaft im italienischen Squadrismus und in der deutschen SA*, Köln 2002, S. 165-182.

（12） 特に本稿で中核となるVBは広範な閲覧のため各党事務所に常備され、党関係者にはその購読が求められた。Reichsleitung der N.S.D.A.P. (Hrsg.), *Dienstanweisung für Ortsgruppe und Stützpunkte sowie deren Untergliederungen der Nationalsozialistischen Deutschen Arbeiterpartei über Kassen- und Buchführung sowie über den Geschäftsverkehr*, 2. Aufl., München 1932, S. 72.

（13） Reinhart Koselleck, *Begriffsgeschichten: Studien zur Semantik und Pragmatik der politischen und sozialen Sprache*, Frankfurt a. M. 2006, S. 82, 92, 97, 99-102. ここで述べているのは概念一般についてである。本稿は「闘争期」において「古参」形象がナチスによっていかに理解されていたのか、もっと広く「古参闘士」という概念がドイツの言語の中で歴史的にいかに理解されてきたのかという問題は扱わない。

（14） Tobias Weidner, Begriffsgeschichte und Politikgeschichte, in: *Geschichte und Gesellschaft* 44 (1), 2018, S. 34f.

（15） Koselleck, *Begriffsgeschichten*, S. 97.

（16） Die 2000 alten Grenadiere der Bewegung, in: *Völkischer Beobachter* (*VB*), 26./27. Februar 1933, S. 2.

（17） Was 14 Jahre in Ehren gekämpft hat, wird niemals in Unehre vergehen!, in: *VB*, 11. April 1933, S. 2.

（18） ナチスの徳目・モラルについては以下。Thomas Kühne, Nazi Morality, in: Baranowski, et al. (ed.), *Nazi Germany*, pp. 215-229; 小野寺拓也「ナチ「民族共同体」論の射程――道徳・感情という視点から――」『ゲシヒ

(30) それぞれの定義は以下を参照。拙稿「ナチ党「古参闘士」」、六五頁。

(31) 例えば以下。Der Ehrentag der schlesischen S. A., in: *VB*, 10. Oktober 1933, S.3

(32) Treffen der ältesten Amtswalter, in: *VB*, 7. Oktober 1933, 1. Beiblatt S. 2.

(33) Vgl. Der Ehrentag der Kämpfer von 1923 in München, in: *VB*, 11. November 1934. 均質性がより明瞭な例は以下で窺える。*Illustrierter Beobachter* (*IB*), 9. Jg. Folge 13, 31. März 1934, S. 476f.

(34) Der Ehrentag der schlesischen S. A., in: *VB*, 10. Oktober 1933, S.3.

(35) Zwölf Jahre Ortsgruppe Hannover, in: *VB*, 13. Juli 1933, S. 3.

(36) Partei und Volk, in: *VB*, 12./13. November S. 2.

(37) Der Ehrentag der Alten Garde der Berliner S.A., in: *VB*, 15. November 1933, S. 4.

(38) Ehret die Alten!, in: *VB*, 24. Februar 1934, Sonderbeilage.

(39) Vgl. Klaus Mlynek (Hrsg.), *Gestapo Hannover meldet…: Polizei- und Regierungsberichte für das mittlere und südliche Niedersachsen zwischen 1933 und 1937*, Hildesheim 1986, S. 147f.（一九三四年四月の報告）情勢報告書は慎重に用いるべきであるが本稿では補足的に援用する。拙稿「ナチ党「古参闘士」」、六六－六七頁参照。

(40) Aufgabe der Bewegung ist die Eroberung des deutschen Menschen für die Macht dieses Staates, in: *VB*, 27. Februar 1934, S. 1f.

(41) Adolf Hitler ist Deutschland und Deutschland ist Adolf Hitler, in: *VB*, 27. Februar 1934, S. 2, Beiblatt.

(42) これに関して、「闘争期」に党とＳＡは活動領域や行動様式で棲み分け、運動の両輪として補完しあった、またヒトラーが運動全体を結束させる最終的な紐帯となったという指摘がある。Vgl. Nolzen, Mechanismen, S. 97f.; Reichardt, *Kampfbünde*, S. 141-199, bes. 165-182, 192-195.

(43) Vgl. Longerich, *Geschichte der SA*, S. 179-182, 201-203.

(44) 例えばバイエルン・オストマルク大管区での集会の報道は以下。Der Treuschwur der Ostmark, in: *Fränkisches Volk*, 26. Februar 1934, S. 1-4. 同大管区指導者も「古参」に言及した演説を展開している。

(45) Der Revolution muß weitergehen!, in: *VB*, 21. März 1934, S. 1f.

(46) Hermann-J. Rupieper, u.a. (Hrsg.), *Die Lageberichte der Geheimen Staatspolizei zur Provinz Sachsen 1933 bis 1936*, Bd. 3, Halle 2006, S. 85.（一九三四年四月の報告）

(47) Ethos der Kampfes, in: *VB*, 9. März 1934, Aus der Bewegung.

(48) 後の同年五月、ゲッベルスが対「不平不満屋」キャンペーンを展開する。主に左派の「敵」の打倒によるダイナミズムの終息、生活・職業状況からの人々の不満、そこをついてナチ批判が力をのばすとの危惧から、論難の矛先は一般の市民、教会や保守、党内の不満分子に対して向けられた。キャンペーンについては以下。Peter Longerich, *Joseph Goebbels: Biographie*, München 2010, S. 261f., 266f., 762.

(49) 他にも以下。Ihr habt das gleiche Ziel: Alte Garde und junge S.A., in: *VB*, 15. März 1934, Aus der Bewegung.

(50) Vgl. Mathilde Jamin, Das Ende der „Machtergreifung“: Der 30. Juni 1934 und seine Wahrnehmung in der Bevölkerung, in: Michalka (Hrsg.), *Machtergreifung*, S. 209. 事件の背景や展開については以下。Longerich, *Geschichte der SA*, S. 165-219; Siemens, *Stormtroopers*, pp. 155-179.

(51) Das Reich steht- und über uns der Führer, in: *VB*, 3. Juli 1934, S. 2.

(52) 例えばレーム、エドムント・ハイネス、カール・エルンストら粛清されたＳＡ幹部らについては以下を参照。Ernst Klee, *Das Personenlexikon*

zum Dritten Reich: wer war was vor und nach 1945, genehmigte Lizenzausgabe, Hamburg 2016, S, 139, 239, 502.

(53) Die Proklamation des Führers an die S.A., in: *VB*, 3. Juli 1934, 2. Bl.

(54) Manfred von Killinger, *Die SA in Wort und Bild*, Leipzig 1933, S. 16-17; ders., *Die SA in Wort und Bild*, umgearbeitete und ergänzte Aufl., Leipzig 1934, S. 16-17.

(55) Andreas Wagner, *»Machtergreifung« in Sachsen: NSDAP und staatliche Verwaltung 1930-1935*, Köln 2004, S. 303f.

(56) Rudolf Heß auf der Reichs- und Gauleitertagung, in: *VB*, 7. Juli 1934, S. 1.

(57) „Wir haben gehandelt, damit der alte S.A. Mann wieder zu Ehren kommt", in: *VB*, 3. Juli 1934, 2. Bl.

(58) Vgl. Der Führer und seine S.A., in: *VB*, 8./9. Juli 1934, S. 1f.

(59) 皮肉と言おうか、レーム自身もSAの「古参」たちを慮る回状を一九三四年二月に発出していた。Vgl. Longerich, *Geschichte der SA*, S. 198f. 気づかれただろうが、同じく粛清されたハイネスやエルンストによる「古参」言説を本論では引用している。

(60) Rudolf Heß über die Aufgaben der S.A., in: *VB*, 8./9. Juli 1934, S. 1f.

(61) S.A. marschiert!, in: *VB*, 7. Juli 1934, S. 1.

(62) Adolf Hitler über den 30. Juni, in: *VB*, 15./16. Juli 1934.

(63) Unterredung mit dem Chef des Stabes, in: *VB*, 7. Juli 1934, S. 2.

(64) 例えば以下。Die Ehre der S.A. ist nicht angetastet, in: *VB*, 17. Juli 1934, S. 1.

(65) Vgl. Hans Bohrmann, u.a. (Hrsg.), *NS-Presseanweisungen der Vorkriegszeit: Edition und Dokumentation*, Bd. 2, München 1985, S. 262, 264f., 270.

(66) Die alte Garde der S.A. spricht zum deutschen Volk, in: *VB*, 14. August 1934, S. 1f.

(67) Chef vom Dienst i. V. Schriftleitung, Dr. Schmitt/Hg., Herrn Hauptschriftleiter Rosenberg, 14. 8. 34, in: Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, NS 8/116, Bl. 141f.

(68) Die alte Garde der S.A. spricht!, in: *VB*, 16. August 1934, S. 4.

(69) Die Proklamation des Führers beim ersten Kongreß des Reichsparteitages, in: *IB*, Sonderausgabe Reichsparteitage Nürnberg 1934, 13. September 1934, 16. Bl.

(70) Feierstunden im ganzen Reich, in: *VB*, 11./12. November 1934, Aus der Bewegung.「政治組織」は大管区から街区までの党本体の役員や支部を統括する部門の総称である。

(71) Bruce Campbell, Gewalt bis in die obersten Ränge: Die höheren SA-Führer der SA-Gruppe Berlin-Brandenburg, in: Hördler (Hrsg.), *SA-Terror*, S. 76-80.

(72) SAの高位指導者は一九三九年までに一五～一八%が懲罰を受けたという。Vgl. Mathilde Jamin, Zur Rolle der SA im nationalsozialistischen Herrschaftssystem, in: Gerhard Hirschfeld, u.a. (Hrsg.), *Der „Führerstaat": Mythos und Realität*, Stuttgart 1981, S. 344-353, bes. 344f.

(73) ポメルン大管区では傘下の党本体の役員に、「一一箇条」を遵守徹底するよう指令が出された。Bleibe schlicht und einfach! Eine Anordnung der pommerschen Gauleitung, 3. September 1934, in: Gauleitung Pommern der NSDAP (Hrsg.), *Gau Pommern im Aufbau*, Stettin 1935, 24. Bl.

(74) Vgl. Rupieper, u.a. (Hrsg.), *Lageberichte*, Bd. 2, Halle 2004, S. 107（一九三四年七月の報告）; Jamin, Das Ende, S. 212f. なおヒトラーは件の国会演説で、「古参」だけでなく、ライヒに貢献する広い層が不可欠であることを周到にも強調していた。Vgl. Adolf Hitler über den 30. Juni, in: *VB*, 15./16. Juli 1934, Beiblatt.

(75) Rupieper, u.a. (Hrsg.), *Lageberichte*, Bd. 2, S. 214（一九三四年一〇月の報告）; Thomas Klein (Hrsg.), *Die Lageberichte der Geheimen Staatspolizei über die Provinz Hessen-Nassau, 1933-1936*, Teilband 1, Köln 1986, S. 205.（一九三四年一二月の報告）

(76) 参照、小野寺「ナチ「民族共同体」論の射程」、四一頁。

(77) August Martin Horn, (ohne Titel), Gießen, 12. August 1934, in: Hoover Institution Archives, Theodore Fred Abel papers, Nazi biograms, Originals: Box 6, #391, S. 5. 詳細は省くが「古参」言説を踏襲するのが窺える他の一例は以下。Robert Thévoz, u.a. (Hrsg.), *Pommern 1934/35: Spiegel von Gestapo-Lageberichten und Sachakten (Quellen)*, Köln 1974, S. 340.（一九三五年三月の報告）

(78) 例えば以下。Siemens, *Stormtroopers*, Part III, IV.

(79) 例えば以下。Jamin, Das Ende; Longerich, *Geschichte der SA*, S. 222-227; Siemens, *Stormtroopers*, pp. 177-179.

（おおぞね　ゆう・芝浦工業大学他非常勤講師）